日本における Big Five パーソナリティの地域差とその背景に関する検討

（概要書）

吉野　伸哉

早稲田大学　審査学位論文（博士）の要旨

パーソナリティ特性は時間や状況においてある程度一貫して示される行動パタンである。このパーソナリティ特性は地域ごとに特徴が異なることが示唆されている。日本においては古くから“風土”や“県民性”の研究として言及されてきた。一方，近年では，海外の研究を中心に，大規模調査のデータセットを用いて，パーソナリティの地域差を定量的に検討する試みがなされている。同時に，どのようなメカニズムに基づいてパーソナリティの地域差が生じるのか，またパーソナリティの地理的な分散が生じることによってどのような社会的なアウトカムがもたらされるのかについても言及されている。本研究はパーソナリティ特性を 5 つに集約して包括的に表現することのできる Big Five パーソナリティを用いて，日本におけるパーソナリティの地域差について定量的に検討した。

本論文は 3 部で構成されている。第 1 部ではパーソナリティの地域差研究を検討するにあたり,その背景的な議論についてまとめた。第 2 部では実証研究を提示し，パーソナリティの地域差について明らかにしていった。第 3 部では第 1 部の議論と第 2 部の実証研究を総括し，本論文で示唆された点やより議論していく必要のある点を整理した。

第 1 部は第 1 章から第 6 章までが該当する。第 1 章では心理学における地域差研究をまとめた。これまでの地域差研究は，西洋と東洋における自己観の差や国ごとにおける文化的価値観の分散といったように，主に文化間の相違が検討されてきた。また，このような心理的特性に地域差が見られるメカニズムについて，地域の慣習と共に受け継がれるということに加え，外在的な環境の影響もあることを指摘した。その上で，これまで取り上げてられなかったパーソナリティ特性について，地域差を検討する意義，および本研究で明らかにする枠組みについて言及した。

第 2 章では近年の大規模調査のデータセットを用いたパーソナリティの地域差研究を概観した。まず，パーソナリティ特性を検討するにあたり,その包括的概念とされる Big Five パーソナリティ (i.e.,

外向性，協調性，勤勉性，神経症傾向，開放性）について論述した。その上で，国・文化間における検討ならびに1国内の地域間における検討をレビューした。いずれの研究においても地域ごとにBig Fiveパーソナリティ得点を算出し，その値に基づいた検討を実施している。これらの研究から，(1) 地域レベルにおいてパーソナリティの分散が見受けられること，(2) 地理的に近い地域はパーソナリティ特性の傾向が似ており，集積が見られること，(3) パーソナリティの地域差そのものは大きくないものの，頑健に見られる傾向があることの3点が示唆された。

第3章では，これまでの日本における地域差研究をまとめた。日本で古くからおこなわれていた風土に関する論考や，県民性の研究をレビューし,パーソナリティの地域差につながる観点を整理した。これらの研究は多分な示唆をもたらす一方，実証的な検討が不足している点や，パーソナリティ特性の概念についての整理がなく，まとまった解釈がなされていない点といった問題点が指摘された。日本における地域差研究は別の心理的特性による検討や1地域のみの特徴を捉えた検討であり，日本全土におけるBig Fiveパーソナリティの様相は不明瞭な状態であることが確認された。

第4章ではBig Fiveパーソナリティの地域差が生じるメカニズムについて論じた。先行研究から，パーソナリティの地域差が生じる理論的背景は，大きく分けて生態的影響，社会的影響，選択的移住の3つのメカニズムが挙げられた。そして各メカニズムについて検証した研究をレビューした。Big Fiveパーソナリティの地域差は，それが存在することそのものだけでなく，地域間にどのような差異があることによってパーソナリティ特性の差が生じているのか明らかにする必要があることを論じた。

第5章では，Big Fiveパーソナリティに地理的な分散があることでもたらされる社会的なアウトカムについて議論を展開した。Big Fiveパーソナリティは個人レベルの検討においても，重要なアウトカム (e.g., 寿命) との関連が示されていることから，地域レベルに

おいても社会経済変数との関連が予想される。先行研究では政治，経済，社会，健康に関する指標と地域レベルの Big Five パーソナリティとの関連が確認されており，個人レベルと類似した傾向を示している。また地域の社会生態によって，Big Five パーソナリティと社会問題に関する重要な変数との関連が調整されることも示唆されている。これらの研究についてレビューした。

第 6 章では第 1 部での議論を総括し，本研究の目的を以下の 3 つにまとめた。第 1 に日本における Big Five パーソナリティの地域差の存在を検討することである。第 2 に Big Five パーソナリティの地域差が生じるメカニズムを検討することである。第 3 に Big Five パーソナリティの地理的分散によってもたらされる社会的アウトカムを明らかにすることである。

第 2 部は第 7 章から第 10 章までが該当する。第 7 章では日本における Big Five パーソナリティの地域差を大規模調査のデータセットを用いて検討した。Big Five パーソナリティ尺度である TIPI-J (研究 1) や BFI-2-J (研究 2) を用いて，都道府県を地域区分として分析を実施した。4 つのデータセットを通じて比較的頑健な傾向を示した地域的特徴は以下が挙げられた。首都圏では外向性が高い傾向が見られた。反対に，東北地方や中国地方では外向性が低かった。また東北地方や中国地方では神経症傾向も高かった。さらに九州東部では協調性が高い一方，北陸地方では協調性が低い傾向が見られた。

第 8 章では Big Five パーソナリティの地域差が生じるメカニズムのうち生態的影響と社会的影響について検討した。生態的影響は自然環境に着目し，日照時間 (研究 3) や自然災害の被害 (研究 4) との関連について検討した。地域レベルの関連において，日照時間は神経症傾向と負の関連，自然災害の被害は神経症傾向と正の関連，外向性や勤勉性と負の関連を示した。社会的影響は，居住地域において自動車に依存せず，徒歩で生活を営むことができる程度を示すウォーカビリティとの関連を検討した。居住地域のウォーカビリティのスコアと Big Five パーソナリティを個人レベルで検討したとこ

ろ，ウォーカビリティは外向性と正の関連を示しており (研究 5)，とりわけ外向性の活力度の側面と関連していることが示唆された (研究 6)。

第 9 章では Big Five パーソナリティの地域差が生じるメカニズムとして，選択的移住について検討した。転居願望 (研究 7) や実際の首都圏への転居行動 (研究 8，9) との関連を検討した。その結果，開放性が高いほど転居を望みやすいことが明らかになった。また地方から首都圏への転居は，外向性や開放性が高いほどおこないやすいことも示された。一方，外向性はもともと首都圏に居住している人も高いことも示唆された。日本は居住地の流動性が比較的低いことが明らかになっているが，パーソナリティ特性における関連は見られることが示唆された。

第 10 章では Big Five パーソナリティの地域差がもたらす帰結，すなわち日本における Big Five パーソナリティと社会的アウトカムの関連について検討した。都道府県レベルにおける Big Five パーソナリティと政治，経済，社会，健康の各指標や主観的 well-being の間の関連について検討したところ (研究 10)，海外の研究と共通する結果や理論的整合性のある結果が得られた。また社会生態による調整効果を検討するため，外国人居住者に対する寛容性と Big Five パーソナリティの関連を検討した (研究 11)。その結果，外国人居住者の人口割合が高い地域において，勤勉性が高い人ほど外国人居住者に対する寛容性が低い傾向にあることが示された。

第 3 部は第 11 章から第 12 章までが該当する。第 11 章では実証研究の結果を整理し，より統括的な議論をおこなった。第 7 章と第 8，9 章の結果を総合し，パーソナリティの地域差が生じるプロセスについて論じた。たとえば，首都圏の外向性や開放性の高さは選択的移住によるものである可能性が示唆された。

第 12 章では本研究の限界と今後の展望について論じた。今後の地域差研究の展開として，第 1 に Big Five パーソナリティの各特性だけでなく，そのファセットや特定的なパーソナリティの地域差に

も着目することが挙げられた。第 2 にパーソナリティの地域差のメカニズムとされる生態的影響，社会的影響，選択的移住についての複合的，連続的なプロセスの検討が挙げられた。第 3 に地域差を検討する上での地域区分の問題が挙げられた。第 4 に理論的なモデルの構築が挙げられた。